

「古典の世界像」調整班講演

東西古典世界における 「学」の理念と内実

総括

司会 月村 辰雄

今回の調整班講演は、ギリシア、中国、インド、イスラム、ユダヤという、深い歴史を有する諸文明圏における「学」のあり方をテーマとして、「古典の世界像」(A04班)から基調報告をいただいた。「学」のあり方あるいは伝承の歴史、ないし学問の目的あるいは方法の歴史については、それぞれの専門領域で当然膨大な量の議論や研究の積み重ねがあるわけだが、それが学問史それ自体として非専門研究者の目に触れることはきわめて稀である。「学」の成果は容易に発表の対象となって注目を集めるが、その成果を支える「学」の方法、ましてやその方法の歴史となると、実際にその「学」に携わる研究者以外の目には触れにくい。その意味で、「古典の世界像」班の方々に手際よくまとめていただいた今回の報告は貴重である。

問題は、その成果をどのように有機的に関連づけ、そして総合的に意義ある形にまとめるか、という点にあるように思われる。断っておくが、たとえばギリシア学の方法論と中国学の方法論とを多面的・組織的に比較検討するという作業はまだほとんどなされていない試みであって、その意義付けさえも議論の対象とはなっていない。つまり、この試みがギリシア学や中国学をなんらかの形で裨益することがあるのかどうか、それともこの試みは単一文明圏の「学」を越えた位相にその展開を求めるべきなのかどうか、しかもその場合になんらかの確実で有益な成果を期待できるものなのかどうか、という疑問さえ答えられないまま横たわっている。

今回のシンポジウムは文字どおりの出発点である。従

って、私たちは手始めとして、それをめぐって比較検討作業の議論を積み重ねることができるような、いくつかの堅牢な論点の抽出に努めるべきであろう。私見に拠れば、各文明圏の「学」の目的や方法についての今回の報告の中には、以下の二つの共通の問題意識が見てとれるように思われる。その一は、いずれの文明圏においても「学」がそれ自体として独立して生成・存在したのではなく、かならずなんらかの「上位者」からの規制の意識のもとに展開している点であろう。この「上位者」をどのように名付けるかは、個々の文明圏の偶然の問題であるが、ユダヤ学では「学」はその材料を神の言葉のみに限り、イスラム学は「学」を最高の権威である神についての知識を深め、神を賞讃することと規定する。「学」とこの「上位者」との関係性の問題、またこの「上位者」の規制力の問題は、おそらく中国学、ギリシア学、インド学にまで及ぶであろう。はたして「学」の独立ということが可能であるのかどうか。「学」が現実世界における効率という概念を新たな「上位者」として仰ぎ、産学協同というスローガンがやすやすと文科系諸学にまで入り込んでいるように見える現状に照らし合わせて興味深いところであろう。

また比較の論点のいま一つとして、おそらく第一の論点から多分に派生することだが「学」と、その「学」を背後から支える精神世界との関わりという問題を掲げることでもできるように思われる。つまり、それぞれの「学」のエートス、ないしメンタリティーというものであって、ギリシア学の骨格にはそもそもポリス社会の構造を見なくてはならないし、中国学は家族制度、ないし「家」の永続という観念抜きには考えられないように思われる。一見したところ、神という「上位者」の拘束のもとにあるユダヤ学、イスラム学、インド学の背景にも、こうした「学」を取り巻く現実社会の基本理念の反映が、なんらかの形で捉えられないであろうか。またもし捕捉でき

ないとしたら、その理由はどこに探索すればよいのか。

以上の基調報告ののち、シンポジウムはパネリストと会場との質疑応答に移り、そこでもまた、今後豊かな展開をもたらすべき基本的な論点のいくつかが提出されることとなった。まず、朴一功氏（甲南女子大）が掲げたのは、「学」の形成ないし展開にあたって「自前の」力と「外来的な」力がどのように働くかという問題である。氏によれば、プラトンはそのディアレクティケー（対話）という方法で在来の「学」に批判を加え、いわば在来の「学」の諸要素間の相互矛盾を鋭く突くことから新たな「学」の形成に至った。他の文明圏の諸モデルと異なり、珍しく「自前の」力による「学」の更新が企てられたことになるが、これは「学」の連続と非連続の問題に発展させることができる。パネリストの方々からは、朱子学形成期の例、またユダヤ学における三段階の転換期に働いた外力の例などが示された。

また相田満氏（国文学研究資料館）は、特に「学」の伝承のシュポール（支え）である文字ないしその書体の変革期と、当該文明圏におけるなんらかの危機感との関連を指摘された。パネリストの方々からは、たとえば紀元前後に中期インド語のサンスクリット化が進められ、その結果バラモン層以外の階層も古典に接することができるようになった現象が挙げられ、その変革の背景には当時の異民族の侵入という一種の危機が存在すると説明された。私見によれば、いくつかの文明圏では書体の変革と古典の伝承は密接に関連する興味深い問題である。たとえばビザンツ世界では、9～10世紀と13～14世紀の二度にわたり書体の変革が生じ、古典を伝える写本は新しい書体に移されたわけだが、そのつどなんらかの校訂作業がなされて標準となる最良テキストが定められ、それが新しい書体で流布する結果となった。古代ギリシアのテキストがその古さにもかかわらず比較的良好的形で伝えられたゆえんであるが、このうち第二の変革の時期はパレオロゴス朝ルネサンスと結びついている。また西ヨーロッパのラテン語世界でも、カロリング・ルネサンスにおける標準小文字書体の形成にともなって写本の校訂と書き換えが組織的におこなわれ、標準テキストが定められたようである。社会的な危機（第四次十字軍のコンスタンティノープル占領、ないしメロヴィング期の社会的混乱）に続く安定期に新しいシュポールが出現し、それが古典のテキストの統一を促進し、またその一方でおそらく多くの異文を切り捨てたわけであるが、これなどは、現在進行している各種メディアのデジタル化が古典のテキストにどのような影響を加えるかを占う上で興味深い。

以上、論点によって、すべての文明圏における古典学

のあり方にかかわる場合もあれば、またいくつかの文明圏の古典学の焦点からはずれる場合もある。後者の場合、その論点は当該文明圏の古典学史によって取り扱われなかったわけだが、それをあらためて問い直す作業を通じて、その文明圏の古典学は新しい問題群と向かい合うことになるであろう。いずれにせよ、「学」の理念というテーマは、論点整理のプロセスを経た上で、あらためて討議されるだけの価値がある。研究課題としてどれほどの労力を費やせばどれほどの成果が得られるか、そのランタビリティ（収益性、採算）はきわめて高いといえよう。

古代ギリシアにおける 「学」の理念と内実

内山 勝利

あるギリシア哲学史家は、こう述べている。「science（学、知的認識）を記述するには、世界についてギリシア人の流儀で考えることである」という言い方をすれば、それで十分である。なぜscienceがギリシア人の影響を受けた人びとの間にしか存在してこなかったかの理由もそこにある」（J. Burnet）

事実、近代西欧のscienceは、基本線として、ローマ、ビザンツ、西欧中世世界を経由する仕方で、古代ギリシアの理念とプログラムを受容したものであった。それが「ギリシア人の影響」なしに成立しえなかったことはまぎれもないところである。

ただし、その淵源にあったものが、長い受容の過程において、いささかの変貌を遂げていったことも否めないのではないか。さきのパーネットの発言は、事後的に捉え返した抽象的なギリシア像をなぞっているようにも思われる。（むろん大局的には的確な捉え方になっていると思われるが、今日のように、多様な古典分野の方々が一同に会している場ではどのように響くものか、もはや単なるアナクロニズムに墮しているのか、依然として有効性をもっているのか、反応を気にしながら、冒頭へあげてみた。）

古代ギリシアの「学」の理念は、「愛知の精神（philosophia / 哲学）」を中核とする。それは当初、明らかに、前6世紀初頭あたりにこの地で「発見」された、人間の